

平成28年度第3回大村知事と語る会

- 1 日 時 平成28年12月19日（月）午後2時から午後4時まで
- 2 場 所 愛知県庁本庁舎 正庁
- 3 テーマ 地域防災力の向上

—つくろう！安心・安全なあいち—

4 意見交換者（五十音順、敬称略）

- | | |
|--------|--------------------------------------|
| 尾関 博 | あいち防災リーダー会 会長 |
| 加藤 實 | 東海学園大学経営学部 教授 |
| 後藤 直哉 | あいち消防団応援サポーター |
| 長谷川 直 | 江南市消防団 消防部長 |
| 早川 典夫 | 星崎学区連絡協議会 災害対策委員 |
| 東嶋 とも子 | NPO法人愛知県西部防災ボランティアコーディネートネットワークの会 代表 |
| 森 俊治 | 株式会社エージック 常務取締役 |

【知事】 皆様、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。本日は、お忙しい中、この知事と語る会に御参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

この会は、県政の重要な課題をテーマといたしまして、第一線で活躍されている皆様から御意見を直接お伺いし、今後の県の施策に役立てようというものでございます。毎年3回ぐらいやっております、今年度第3回目は「地域防災力の向上」ということをテーマにさせていただきました。

後ほど簡単に概略説明がありますが、私どもの日本列島は、古くから自然災害等々と隣り合わせで生きてきたという、そういう地勢的・地理的なもの、そういう歴史的な事実がございます。環太平洋火山帯でありますから、世界で起きる地震の1割はこの日本で起きるといふこと、また、アジアのモンスーン地帯でありますので、当然のことながら台風、風水害等々もある。そういう自然とともに我が日本民族は生きて、いろんな災害に遭ってもそれを乗り越えて今日の発展があるということだと思っております。

そういった、いにしえからの知恵といったものですかね、そういったものも踏まえながら、また、どんな災害にも打ち勝って乗り越えていける、そういう力強さをもっと我々は

持っていかなきゃいけない。そのためには、お互い助け合っていくということも大変大事なことだと思います。

そういうことを念頭に置きながら、近年の阪神大震災、また東日本大震災、そしてまた今年の熊本地震等々、そういった地震対策もしっかりやっていかなければならないと思いますし、また、この地域は伊勢湾台風等々の大きな被害もありました。こういった風水害に対しても、やはりそういう対応力をしっかり作っていかなきゃいけないということだと思います。

そういう意味で、この地域は人口も多いし、やはり産業的にも日本経済のエンジンとなる地域でもあります。そういう意味では、災害が起こることは仕方のないにしても、一日も早く復旧・復興していかなきゃいけないということでもあろうかと思っています。そういった面で我々は防災と減災と、それからまた復興と、復興力、復元力、そういうことを念頭に置きながら、さまざまな施策をつくっていかねばいけないと思います。

安心・安全な愛知をつくることは県民の皆さんの大きな願いだと思います。そういった観点で、第一線で御活躍をいただいている皆様に今日はお集まりをいただきました。どうか皆様方の御経験、御体験、そしてまたさまざまに取り組んでおられることを率直にお話しただいて、また多くの皆さんにそういったことを知っていただければと思っております。

以上、簡単に今日の趣旨を申し上げさせていただきました。なお、今日はネットで中継させていただいておりますので、多くの皆さんに御覧をいただければと思います。そういったことも踏まえて率直な、忌憚のない御意見、御発言をよろしくお願い申し上げて、冒頭の御挨拶とさせていただきます。

それでは、早速進めさせていただきたいと思います。まず、順番に御出席いただいた皆さんに5分間程度、日ごろの活動を通じて、地域の防災力を高めるために必要と感じておられることなどをお話しさせていただきたいと思います。その後いただいた御意見をもとに、皆さん全員でフリートークと申しますか、言い足りないことがあろうかと思っておりますので、もう一回、一巡をさせていただいてまたいろいろ御意見をいただければというふうに思います。

それでは、早川さんから順にお願いをできればと思います。よろしくお願いいたします。

【早川】 星崎学区の早川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(スライドを示して) これは名古屋市の上空の写真です。私どもは南区のこの位置にあ

りまして、星崎学区は御存知の方も多いと思うんですが、一級河川の天白川に囲まれた星崎小学校を中心としたコミュニティーです。隣の行政区は緑区、こちらに行きますと東海市に近いところです。南区を見ていただくとわかりますように、名古屋港の海面とそんなに変わらないようなゼロメートル地帯が非常に多い、こういった地域特性のある星崎学区でございます。

伊勢湾台風を経験している地域で、「水」ということに非常に敏感な土地柄でございます、このたび3・11の津波を経験したことによって、地域の方から、あのような津波が来るのではないかという、そういった不安な御意見というか、心配事がいっぱい上がってきました。

では、一度、まち歩きをしようではないか、ということでNPOさんとか学識経験者の方たちに御協力をいただいて、住宅地図を片手に約300名ぐらいの人たちが、自分の町内をくまなく歩いて、みんなで危険箇所を調べていきました。

地域の特性や特徴を知ることによって、あるいは地域の人を知ることによって、何とか自分たちの地域のリスクを知って災害に強いまちにしたいという私たちの思いがありましたので、歩き回って地図に落とし込みました。

子供さんの目線では、ここにガードレールがありますね。大人は単なる自動車道と歩道との区別をさせる安全のためのガードレールだと思っていたら、子供さんが、避難所である小学校へは、このガードレールを伝っていけば必ず行けるんだよ、という発表をされたんですね。

このとき大人はあ然としました。大人は単なる車道と歩道のためのガードレールだという認識ぐらいしかなかったのが、子供の目線から見るとそういう、お父さん、お母さんがいなくても災害が起きたときにはこれをたどっていけば小学校、避難所へ行けるんだという発表をされた。保護者と一緒になってワークショップを開いて、ここでコミュニケーションが図られ、最後には御褒美としてバーベキューをやったと。これが非常に効果が高かった。この紙に書いたマップを（電子化して）防災科学技術研究所のコンテストに応募したところ、何と最優秀賞をいただいた。これが成果物です。

これを詳しくお話ししますと、アイコンをクリックしますと、画像が入れ込んでありまして、ここは海拔が一番低くて、ちょっとした集中豪雨があると必ずこの家の周りから浸水が始まる。ここの地区の方は御存知なんですね。今では（雨水の）地下貯留管がありますので、すぐ引いていきますけれども、当時はまだそこまでいっていなかったもので、こう

いうインターネットを使ったマップですと自宅にいながらにして自分たちの地域のリスクがわかる。災害リスクがわかるという利点があるということで、最優秀賞をいただけたのではないかなと、こういうふうにも思っております。これを使うと地球の裏側からも見えると、こういう利点があります。

この取組ですけれども、学識経験者、あるいは防災科学技術研究所の研究者からのアドバイスがありまして、6つの視点、どんな災害が起こり得るのか、あるいは災害はいつ起こるのか。例えば季節、曜日とか時間帯、こういったことも視点として捉えなさい。それから、災害が起こったらどこの地域の何が危ないのか、どのような対応が必要なのか、必要なのは人なのか、物なのか。対応に必要なことは今どうなっておるんだ、というようなことを視点として捉えて活動するといいいですよ、というアドバイスがありました。

そんな中で、私たちは防災ラジオドラマもつくりまして、いわゆるハンディキャップを持った方たちの助け合いをどうするんだというようなことから、1人の要援護者に対して2人の支援、それから1人の町内組長さんを入れて個別の支援計画を立てて、3人でハンディキャップを持った人を助け合いましょと。共助ですね。

これは最後になりますけれども、私ども昨年から地区防災計画を作成しております。地区防災計画の主たる目的は共助なんですけど、よく自助、共助、公助と言われますけれども、私どもは近助、この「じょ」というのは「助」と書きますけど、向こう三軒両隣と仲よくして、御近所みんな町内で助け合って、最後には災害に強いまちづくりをしよう。事前復旧・復興活動を今進めているところです。

【知事】 ありがとうございます。すばらしい地域の取組でございました。

それでは、東嶋さん、よろしく申し上げます。

【東嶋】 NPO法人愛知県西部防災ボランティアコーディネーターネットワークの会、ちょっと名前が長いんですが、代表の東嶋といたします。

この会は、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災でのボランティアコーディネーターの活躍と必要性というのに注目して愛知県が始めた「防災ボランティアコーディネーター養成講座」を平成9年に受講したメンバーで始めました。

所属市町村がばらばらなものですから、広域連携ということに注目をして各所属の市町村の職員や社会福祉協議会の職員さんにも声をかけてメンバーを募り、団体を立ち上げました。当時は県内にまだボランティアコーディネーターが少なかったものですから、いろんなところから依頼がありまして、県の防災局さんを事務局として、一緒に活動を始めた

のが私たちの会の初めの活動です。

そのときにお目にかかった方々は平成12年の東海豪雨、そのときにもいろいろなところで活躍してみえて、再会の場所にもなり、一緒に頑張ろうというような声かけをしました。

その後いろいろな防災の勉強をする場や、養成講座など、県のほうでもいろいろやってみえまして、減災に対しての考え方が進んできているところでふと考えたときに、今、私が早急にかかわらなきゃいけないと思ったのは幼児、児童です。子供たちにもう少し自助を進めていきたいなということを思いまして、今、保育所とか小学校で活動をしています。

その様子をちょっとスライドで説明させていただきます。

子供たちには合い言葉で、「自分の命は自分で守るんだよ」というようなことを言っています。保育所の取組を少し例に挙げさせていただきますと、弥富市には保育所が9か所あるんですけど、毎月防災訓練をしております。まずはシェイクアウト、(姿勢を低くして、頭を守りながらじっとするポーズを)子供たちには“ダンゴムシ”という言葉で説明をしているんですが、先生の指示に従うこと。目をつぶって耳を塞ぐのではなくて、先生のほうをちゃんと集中して見ましょう、そして、声を聞くんだよ、ということで活動をしています。3歳、4歳、5歳の幼児組の子には、乳児さんのところに先生が必要だから、自分でできることをしなさい、というようなことも言っています。これは十四山保育所というところでダンゴムシをしている子供たちの様子です。(子供たちに対して)大きな地震のとき、自分の命は自分で守る、というようなことをスライドを使って説明したりすることもあります。

もう一つは、常時自分の部屋に置いておく、家族が1人1つずつ持っていく非常持ち出しについて。逃げるときに持っていく持ち出し袋は、ベストにしましょうという提案をしています。これは先ほど星崎学区の方がおっしゃったように、私の家も海部地方ですので、海面より低いところに住んでおります。小学校と保育所にはライフジャケットが市から配付されていて、そのライフジャケットを持ったまま、まずはとにかく高いところに逃げようということで、走って逃げる訓練をしております。

そのほか、保育所では、トランシーバーを使った訓練もしております。特に、坂道や液化化したときなどに、乳母車で避難は困難を極めるということで、リヤカーを使った訓練をしています。また、けが人であったり、小さい子を避難させるのには、台車を使うのもよいのではないかという話もしています。

問題なのは、ゼロメートル地帯ですので、高所避難場所ということで避難階段がつくら

れているわけですが、この階段を上るのに0、1、2歳児は1人ずつおんぶして2階に上げるとい訓練をしており、職員さんは3、4回往復して、1人ずつ（2階に）上げております。親御さんとか地域の自主防災組織の方に、見学や参加をしていただきながら、一緒におんぶして避難することで、その大変さを伝えているところです。

この（訓練をやっている）ときに、ちょうど3、4歳ぐらいの子のお母さん方が、昔のおんぶひも（の使い方）がわからなくて、おんぶができないということがありました。今ベルト型が多いので、非常にこれも困難だということで、覚えなきゃいけないね、というようなことも（訓練に参加した感想として）言っていました。

以上、保育所での活動紹介をさせていただきました。

【知事】 貴重な活動を進めていただきありがとうございます。

それでは、続きまして後藤さん、よろしくお願いします。

【後藤】 あいち消防団応援サポーターの後藤といいます。ちょっとスライドはないので、口頭と配布された資料で説明させていただきます。

愛知県の消防団のPR及び消防団員の確保対策を支援し、地域防災力の充実強化を図ることを目的として、あいち消防団応援サポーターが設置され、6月に愛知県の犬村知事より任命され、活動をしています。

PR活動として、消防団員の募集であったり、消防団員のイメージアップ推進、消防団の催し物への参加協力、例えば自分のブログやツイッターなどのSNSを活用し、愛知県の消防団の魅力を発信するというのが今の段階では主な任務になっています。

あいち消防団応援サポーターは今年（平成28年）2月の消防団カレッジフェスティバルにおける消防団エンブレムコンテストや消防団PR動画コンテストの入賞者3名とカレッジフェスティバルの企画運営に協力した、NAGOYA学生キャンパスさんと名古屋わかもの会議さんの、2団体と個人3名が活動しています。

あいち消防団応援サポーターに任命されて半年ぐらい経ちますが、さまざまな活動を個人でしてきました。まず、消防団応援の店で使える消防団員カードや家族カードのデザイン案をつくらせていただきました。

7月には、愛知県消防学校で行われた消防団の操法大会を見学したり、8月には愛知県・岡崎市総合防災訓練で岡崎市の消防団や消防本部、県警、自衛隊の協力する姿を見学したりしました。

11月には、私の知り合いが名古屋市の田代小学校というところにいまして、その地区

の訓練に参加しながら、消防団が普段どういった活動をしているのかな、というのを見学してきました。田代消防団も高齢の消防団員の方が多くて、消防団にはやっぱり若者の力が必要と僕は考えています。

若者が消防団に入ることによって地域の活性化にもつながりますし、消防団にもっともっと大きな、若者の力で行動力を増やしていこうということが私は必要だと考えています。そのために、まず消防団というものを若者の皆さんに知ってもらうこと、これが僕はまず一番最初に大切なことだと思っています。

消防団と消防士の区別がつかないという若者が近年では多いので、まず消防団がどんな活動をしているのか、普段は仕事をしていて災害時、火災時に駆けつけるんだよという、まず根本的な部分から知ってもらうために、先ほども言ったようにSNSを活用して紹介していくことが大切だと思います。

また、消防団のPR活動だけでなく、こんなイベントもやっているよとか、例えば若い消防団員や学生分団の紹介をすることで、同じ年代の人たちがこんな活動をしているんだという、知らない人に消防団をまず知ってもらうきっかけになれば大きな一歩になるのかなと僕は考えています。

先ほども紹介したんですけど、消防団カレッジフェスティバルというのが2月に開催されまして、詳しく説明させていただきますと、2月11日にプラチナム名古屋という松阪屋の北館のところで開催されました。

消防団のファッションショーや活動服の紹介のほか、あいち消防団応援サポーターPRコーナー、知事とGENKINGさんのトークショー、学生消防団員による事例発表など、こういう知っていただくきっかけになるフェスティバルをもっともつつくっていったら、若者が消防団をまず知る、その次に消防団に入る、それで地域の安全を守っていくことが大切だと僕は考えます。

【知事】 ありがとうございます。今年2月にやりましたね、カレッジフェスティバル。ありがとうございます。若い力でこれからもまたしっかりと消防団活動を応援していただきたいと思っています。

それでは、続きまして森俊治さん、お願いいたします。

【森】 株式会社エージックの森でございます。それでは、中小企業を代表しまして、取組についてのお話をしたいと思います。

(スライドを示して) 我が社は春日井市の南に位置しておりまして、昭和23年6月に創

業しております。名前については平成2年6月に株式会社エージックと改称をいたしまして、ISOについても9000、14000、それぞれ12年、14年を取っておりますし、愛知ブランドについても18年、愛知県から認定をいただいております。それから、19年の6月には、元気なモノ作り中小企業300社ということで経産省から認定をいただいております。

我々の会社は主にセラミック（を扱う会社）でございまして、オールドセラミックとして碍子、碍管、それからファインセラミックとして自動車部品、電子部品を製造しております。

BCPに対しての取組としまして、中小企業に要求される基本的な方針というのは5つほどございますけれども、私どもはやはり人命の安全を第一に守るということだと考えています。そのこと自体は当然経営を維持するためにも大事ですし、経営資源としてやはり「人、物、金」あるいは「人、金、物」という3要素の言い方がございますが、やはり「企業は人なり」と言われるように人が一番大事ということで、従業員をいかに守るか、ということを考えております。

リスクについては、就業中の大災害ということで、取り組まなきゃいけないこととしては、まず地震の震度、それから発生の時刻の想定、それから早く知るための予知、それから保護具ですね。それから、建物は大丈夫なのかという診断と補強、それから状況によっては帰れない状況もあるでしょうから、帰宅基準というもの、それから帰宅困難の場合に備蓄をどこまで確保するかということを考えております。

あとは定期的な訓練実施によってPDCAを回していくということです。（災害）想定は当然、東海・東南海連動（地震）を想定しておりますし、春日井市では20年3月に地震防災マップというものを作っております。我が社の所在地は、震度6弱という想定でございます。

それで、予知の手段としては、“デジタルもぐら”というものがございまして、緊急告知受信機ですね。これは緊急地震速報、あるいは緊急警報が放送されたときに自動的に受信して、これを社内放送と連動して早く構内放送で流せますので、備えることができるということですね。

それから、従業員については当然ヘルメット、それから皮手袋。軍手でなくて皮手袋なのは、やはりガラスが割れたり、鋭利なものが多いと思いますから皮手袋を準備しました。これが“デジタルもぐら”と言われるもので、推定震度が5弱以上のときに自動的に社内放送がなされます。

あとは建物の耐震についてですけれども、(創業が)昭和23年ということで古いものから、耐震判断と補強工事ということで5つ項目がございますけれども、約10か月をかけて、費用的には2,000万ほどですけれども、それをかけて完成をさせました。

あと帰宅基準ということになりますけれども、我が社を基点にして5キロ圏内は帰宅可能だろうということで、(従業員全体の)大体3割程度います。この人たちについては、3食、それから飲料水2リットルを(ペットボトル)1本ということで持参させて帰宅させよう。

5キロ圏外については帰宅困難者として、約7割、50名ございますけど、これについては3日間分の食料、それから水、必要な防寒的な対策ということで準備しております。

これが春日井市でいいますと大体5キロ圏内と10キロ圏内、JR中央線でいいますと1駅から1駅半ぐらいの範疇が大体5キロですね。それ以上については帰宅はできないだろうということで待機させます。

そのときの備蓄備品は、最近非常に便利なものがございます、御飯、パン、乾パン、それからその他もろもろございます。保存水については(保存期間が)大体6年程度のものであるということで準備がなされております。

それから、社用車を使用して災害に遭う可能性も非常に高いものですから、直線距離で10キロ圏内についてのものと、10キロを超えるものについて、異なる装備品を準備しております。10キロ圏内ですけれども、ヘルメット、皮手袋、簡易トイレ、それから(防寒)シートですね。それから、10キロを超えた場合には多少けが等の問題もあるでしょうからということで、ちょっとした応急セットと、それからあとは電氣的な問題もございますので、自走手回し充電用のライトというものを準備しております。

それから、訓練については毎年10月に避難訓練、それから消火器の初期消火訓練ですね。これは毎年10月に行っております。それから、適宜ですけれども、普通救命としてAEDを使った訓練を行っております。あとは月1の点検として、消防ポンプの点検、放水訓練、これに基づいてそれぞれ適宜、打合せ会を行いましてPDCAを回していくという形になります。

これは初期消火訓練ですけれども、通常、消防署などに依頼をしますと(消火器の替わりに)水を使いますが、我々は構内に150基ほど(消火器を)持っておりますので、毎年更新する必要がございます。その更新時期をうまく利用しまして実装、実物でやります。これは缶に水を張り、ガソリンを入れて火をつけまして、実際にこうやって噴射をして訓練

をします。実際やりますと、風の向きとか炎の向きというのが非常に大事だということがわかると思います。

それから、普通救命講習については消防署のほうに依頼をしまして、5人1組で大体20名、これも適宜行っております。当然AEDは使っております。これは月1の点検風景で、これは非常時の発電機、これがポンプです。放水訓練ということで、月1でやっているということになっております。

【知事】 ありがとうございます。きめ細かい対応ということですので素晴らしいことだと思っております。また後ほどよろしく申し上げます。

それでは、次は尾関さんですね。よろしくお願いいたします。

【尾関】 私どものあいち防災リーダー会は、県が平成14年から平成18年まで開催した、あいち防災カレッジを受講したメンバーの一部が、愛知県下の自主防災会の活性化をそもそもの目的として設立したグループです。今現在、愛知県では650名の会員がいます。

そこで、各地区に分かれて、特に県内を6つのブロックに分けて活動しております。さらにブロックの中で各市町村毎に支部を設置して実際の活動しておりますけど、活動の内容としては自主防災会の活性化ということで、実際の自主防災会へ行って防災訓練とか講話などを行って、少しでも自主防災会が活性化するような支援を行っております。

それ以外に、学校とか老人会、その他要請があればそこへ（会員を）派遣して講演をするというようなことをやっております。最近では、県の防災局と覚書を締結したことによって、家具転倒防止の推進員として、家具転倒防止の講師派遣という形で今現在も防災局とタイアップして行っております。

他にも、地域とか学校等でDIGとかHUGとか言われている講習などを積極的にやっているつもりです。また、視聴覚障害者の方からも最近はや要請があり、そちらのほうへも講演にお伺いしております。

さらに私どもは平成27年度に、防災功労者内閣総理大臣表彰というのを受賞いたしましたので、これが私どもの一番の名誉かなというふうに実は思っております。

それ以外に、最近では今年の12月からだったと思いますけど、県の防災教育センターで、今年度から新しくなった家具固定器具の取り付け実演や、ガラス飛散防止フィルムの貼り方の体験とか避難所運営ゲーム、いわゆるHUGの体験とか、災害机上訓練のDIGの体験ということで、ここへも講師を派遣して防災教育に努めているという次第でございます。

こういう中で、我々は愛知県だけで活動しておりますが、先日静岡県の同じような関係

で動いている方から電話をいただきまして、(知事と語る会で) 愛知県知事さんと話をするんだよ、ということをお話したら、愛知県は非常に大きいところだし、静岡、愛知、岐阜、三重ぐらい、あるいは和歌山ぐらいまでの(エリアで) 連携した防災のイベントを何か企画してもらえると非常にありがたいね、というようなお話もいただいております。我々からも、近隣の市町村ばかりではなくて、県の大規模災害を考えたところでサミットみたいな形でやっていただければというふうに思っております。

【知事】 ありがとうございます。防災リーダーとして、防災のいろんなイベントにいつもブースを出して、活発に活動していただきましてありがとうございます。また後ほどよろしく願いいたします。

それでは、続いて長谷川さん、よろしく願いいたします。

【長谷川】 江南市消防団女性消防部長の長谷川です。よろしく願いいたします。

では、スライドを御覧いただきながら、江南市の女性消防団の活動を御紹介します。

このスライドは、毎年6月から7月にかけて行っています、園児を対象とした花火教室の写真です。正しい花火の仕方などを園児に学んでもらっています。全部で23か所ある保育園、幼稚園を回りますので、都合がつく日を調整して、女性消防団員が交代で消防職員の方々と一緒に出かけております。

このスライドは、8月に行われました江南市サマーフェスタのときのものです。サマーフェスタの行事の中に市民参加による阿波踊りを踊るイベントがあり、この機会を活用して女性消防団のアピールと同時に、火災予防の啓発を行ったらどうかと自分たちで考え、今年度初めて参加しました。女性消防団員さんの表情からもわかるように、とても楽しく参加できました。また、来年度も今年以上にアピールしていきたいと思っております。

“女性消防団ふじぐみ”という名称は、江南市の花フジを由来にして女性消防団員の話し合いにより決めた名前です。左上の看板を持ち先導している方は江南市消防団幹部の副団長のお二人です。

このスライド写真は、(江南) 市内にあるショッピングセンターさんの協力をいただき、9月9日、救急の日のイベントに合わせて応急手当の啓発活動をしたときのものです。女性消防団員17名中ほぼ全員が昨年度に普通救命講習を受講しました。次は応急手当普及員の認定資格にも挑戦したいと思っております。

こちらのスライド写真は、(江南) 市内商業施設の駐車場の一角をお借りしまして、消防ふれあい広場のイベントのお手伝いをしたときの写真です。子供連れの方々がこの機会に

間近で消防車を見たり、バッテリーで動く（カートの）消ちゃん号、救ちゃん号に試乗したりして楽しんでいただきました。また、住宅防火コーナーでは、住宅用火災警報器や消火器の啓発活動も実施し、火災予防に努めていただくようPRをしました。

続きまして、11月に実施しました防火教室のときの写真です。火の怖さ、火災時の避難の仕方など、園児に学んでもらった様子です。園児たちは私たちの話を真剣なまなざしで聞いてくれるので、やっていてとても楽しかったです。

最後になりますが、このスライド写真は11月に行っています防火診断のときのものです。職員の方と一緒に回るのですが、ひとり暮らしの高齢の方のお宅を訪問して、火災予防への協力とコンロ周りやコンセント付近を見せていただき、お話をさせてもらっています。会話を通してやわらかい表情で私たちと接していただけるので、ついつい長話をしてしまうことがあったりします。

以上でスライドでの活動の説明を終わらせていただきます。

現在のところ私たち女性消防団員は火災などの実災害での出動はありません。しかし、私たちにもできる活動はたくさんあります。御覧いただきましたように、私たちは自分自身が参加したイベントを楽しんでいます。

また、江南市女性消防団17名のメンバー構成も、学生から年配の方までおりますので、数あるイベント全てに出るのではなく、それぞれ団員個人に合った分野で協力できることを考え参加しています。無理のない範囲でメンバーたちと調整しながら楽しく参加し、自分自身が楽しみながらPR活動や啓発活動を行うことが相手への伝わり方、受けとめられ方に影響があり、効果的だと思います。

最後になりますが、今日のこの知事と語る会を視聴された方の中で1人でも共感していただける方がみえましたら、一緒に消防活動を楽しんでみませんかと宣伝させていただき、私の発表を終わります。

【知事】 ありがとうございます。長谷川さんは女性消防団員、2015年（平成27年）からという、2年ということですか。

【長谷川】 2年目です。

【知事】 尾関さんは、（地元が）同じ江南ですが、御存知ですか。そうですか。ありがとうございます。また後ほどよろしく願いいたします。

それでは、加藤實先生、よろしく願いいたします。

【加藤】 私たちは、東海学園大学のみよし市消防団東海学園大学機能別分団というこ

とで活動している団体です。活動のきっかけは、平成17年頃、たまたま私がテレビで阪神・淡路大震災の話を見ておりました。その（地震の）際、6,500人近い方が亡くなったわけですが、一番亡くなったのは高齢者、これは大体わかるんですけど、2番目が実は大学生というのを聞きまして驚きました。高校生、中学生、小学生に比べて大学生が死ぬなんていうのはちょっと私としては理解できなかったんですけども、現実を考えれば地方から来た方が安普請のアパートで、周辺の方とのつき合いもないために救助が遅れたというのが実態ということだと。そう考えますと我が東海学園大学も地方出身者が多いということになりまして、やはり防災に対して何らかの手を打たなければということから私が入り組んだのが実態でございます。

平成19年の段階では、学内で県又は市の方のお力添えをいただきながら、講習会を行いながら学生の防災への意識高揚を図っていたわけでございます。その中で市が主催する防災訓練に毎年参加しましたが、ただ、ボランティアだけでは、組織というのは一度限りで終わってしまう。そこで継続できないか、消防団と連携できないかということで機能別消防団をつくりませんかと言ったんですけども、やはり基本団員をまず固めたいと。

できれば大学の学生さんも基本団員にしてもらえませんかと言ったんですけど、（学生は）当然地域に居住しておりません関係でなかなか実現が難しかった。けれども、平成22年に私たちのメンバーが（訓練に）参加したところ、住民の方が、大変言い方が悪いんですけど、若者が来ると喜ぶという、そこを消防団の団長さんと市の関係者に理解いただきまして、では平成23年の4月に消防団をつくりましょうと。1月に条例変更して、30名の枠で東海学園大学に機能別分団をつくりましょうということで話がついたわけでございます。

その年（平成22年）の12月に、後づけでございますけれども、東海学園大学とみよし市との間で包括協定を締結するというので、その中に機能別分団も組み入れるということになりまして4月1日にスタートしたわけです。けれども、御存知のとおり平成23年の3月に東日本大震災があったということで、さもその震災の結果、できたように言われますけど、実際はそうではございません。

私たち機能別分団としましては、東日本の震災がありましたが、消防団は地域優先ということでございますので、消防団長から東日本の支援に行けという命令が出ない以上動けないということでございましたけれど、みよし市でのお話の中で、学生の有志を集めまして復興支援ボランティアとして6月に現地に行くことができました。当初は市の方も学

生の機能別分団って一体どういうふうに対応していいかわからないというのが本音でございまして、何となく当たりさわりなくということがあったんですけども、これに参加しまして大学生は使えると、はっきり認識していただきまして、その後はみよし市とうまく連携関係ができ、現在に至っているかなということでございます。

(機能別分団の) 消防団活動は基本4つしかございません。入団式、そして5月の水防訓練と8月の防災訓練、そして出初め式、観閲式ということで、これが公式の活動ということでございます。これに関しましては、私たちは集合時間を午前6時半に(大学のある)三好ヶ丘、鶴舞線で考えれば始発で来なければ(集合)できないのでありますけれども、消防団というのは有事の際に全員が参集してこそ価値があるということで、相当学生には無理を強いて、30名全員がこの時間に間に合うということをやっております。

さらに、6時半というのは実態ではありませんで、10分前集合を励行しておりますので、6時20分に集合、6時半は車に乗車して出発するというので、この辺も市の方からも相当驚かれたというのが現実でございます。ボランティアであれば自主性、公益性、そして無報酬性という言葉がよく言われますけど、私たち機能別分団はさらにそこにもう一つ規律性ということと団結心というのを踏まえた形で行っております。

ということで、即時対応力としては10分前、要員としては30名が条例(定員)ですけども、これは2年生と3年生のメンバーで編成している関係でございます。1年生は4月に入学した関係で消防団も辞令が間に合わない。4年生は就職があるということで1年と4年はサポート隊というふうな形で活動しています。実態は約50名の人間を動員できる組織力を持っています。

この(公式の活動)4回だけでは学生ボランティアはもちませんから、まちを知ろうよ、と(いうことで考えて)、防災のまち歩きだけでは1回で終わってしまいますので、そこで私たちは下校時見守りということで、小学校の児童を対象にした活動も行っています。

さらに住民に協力を得るということで、救命を行うということから応急手当普及員の認定資格を全員持っておりますので、普通救命講習会もできます。地域のイベントには全て参加ということで、夏祭り、さらに行政区の防災訓練、さらに産業フェスタにも参加しております。

【知事】 ありがとうございます。加藤先生、御専門はどういう。

【加藤】 僕は法律で、労働法でございます。

【知事】 労働法を教えておられるんですか。消防団の活動とは全然・・・。

【加藤】 法律は国民の生命、身体、財産を守るから防災をやろうという、そこら辺が共通項と置いていただければ。

【知事】 ありがとうございます。また後ほどよろしくお願ひ申し上げます。

それでは、ひととおり、皆様にお話をいただきました。1回目の御発言は大体皆さん言ひ足りないということがあろうかと思ひますので、また追加でもう一言ずつ何か御発言があればお願ひいたします。どうぞ。

【早川】 御承知のように名古屋市内は266の小学校区を単位としてコミュニティーがつけられております。そんな中で消防団というのは各小学校区に1団ずつありまして、これは多団制といいまして我が国でも珍しい制度だと思ひます。この消防団もだんだん少なくなつてきているという現状がありまして、名古屋市では80数%、まだ落ちてくるのではないかと。こんなようなことから、地域での防災力を向上させるためには消防団の地域防災力向上のためのマンパワー、これが非常に大切ではないかということで、消防団員の方たちにもう少し頑張つていただいたらいいかなと、こういう考えも持つておまして…。

例えば星崎学区でいいますと今地区防災計画を策定中なんですけど、共助の部分で、気象災害と地象災害がありますけれども、地震なんていきなり来ますので、そんなときに津波ということ考えた場合に約80分から120分の間に何ができるかということで、星崎学区では避難所に行くまでの地域といいますか、町内単位で1次集合場所を決めて、そこに行つて例えば下敷きになつた人、あるいは火災がどこかで発生している、あるいはハンディキャップを持つた方たちがどんな状態にあるかというのを組長さんが把握して、1次集合場所で自主防災会長に報告して、町内の皆さんで助け合うという形が今できつつあります。

これをマニュアル化して地区防災計画に掲載して名古屋市に提出しようと。3月には提出する準備ができておりますが、共助の部分、“近助”のところをもう少し強調したかったなというところがございます。

【知事】 なるほど。私は名古屋高速によく乗りますけど、星崎学区は星崎のインターのところですよ。あの辺はやはり伊勢湾台風のときはもう相当大きな被害があつたということですか。

【早川】 そうですね。JRを境にしてJRから西側、例えば柴田とか白水、そちらのほうはすごい被害を受けましたが、星崎学区はちょうど東西にJRが走つていましたので、それが堤防の役目をしまして、そこから東側はダメージをあまり受けていないんですが、その西側はとんでもない被害を受けています。

御承知のように、名古屋市の2,000人の被害者の中で南区だけで1,400名、70%の方が犠牲になっていますので、そういう点では星崎学区というのはJRのおかげで助かった人とそうではない地域があると。こういう地域特性があります。

【知事】 地域に住んでおられる方もそういう意味では防災の意識というのは非常に高いんですか。

【早川】 非常に高いですね。水ということに対してはすごく。

【知事】 ありがとうございます。また引き続きよろしく願いいたします。

それでは、東嶋さん、どうぞ。

【東嶋】 もう少し訓練の中のことを説明させていただきますと、先ほど紹介させていただいた子供に対して防災のところで今一番気にかけていることは、最近アレルギーのお子さんがすごく多いものですから、もし無事に逃げてその避難場所にいたとしても、地域の方と一緒にあったときに、お菓子をいただいても大変なことになってしまうというおそれがあるので、避難場所に行った時に、アレルギーがある子なのかどうなのかということはどうやって示そうかということで、反射板がついたマグネットにその子それぞれのアレルギー情報をつけましようとか、あとは防災頭巾ですかね。あれに縫いつけようとか、いろんなことを各保育所で考えてやっています。

それと同時に、お母さん方との話しで、保育所にいるときはやっていたけど、じゃ、家ではどうしようという中で、先ほど少し説明させていただいたんですけど、第1持ち出しということで持ち出しのベストを揃えましよう。

今日ちょっと持ってきたんですけど、子供さん用にこんなベストを用意ましようということで、子供さんと一緒に自分の持ち出し袋の中身を考えましようというようなことでやっています。これは女の子用なんですけど、男の子には男の子用のもので、防災の非常持ち出し袋というのも日常着られて、どこでも使えるようなものということで考えてつくらせていただいています。今、少しずつ親子で考えるということを中心にやっています。

【知事】 ありがとうございます。やはり東嶋さんのお住まいといいますか、弥富地区はゼロメートル地帯ですからやっぱりそういう意識は高いですか。

【東嶋】 地震という想定で訓練をやってしましても、やっぱり伊勢湾台風ということがすごくあるものですから、まずは高所避難所で、地域の中でも早くそういう逃げる場所をもっと造れということを行行政のほうに依頼される方が多い地域なんですね。

ですけど、まずは地震で壊れない家（にする）。先ほど家具転倒防止とかいろんなことが

出ているんですが、まずは逃げられるような（地震の揺れから命を守る）ことを考えていただくのが先だというようなことも話をするんですけど。やはり一番弱者になる子供さんから親御さんに伝えると、結構地域防災活動の中でその話題がうまくいくものですから、そこを混乱しないように災害（対策）の中で気をつけることと思っていますが、やはりどうしても伊勢湾台風のほうに（話題が）振られてしまいます。

【知事】 またよろしくお願ひいたします。

それでは、後藤さん、よろしくお願ひします。

【後藤】 消防団のPRをするためには、自分が消防団員であったほうがいいなということで、私も中京大学の機能別分団、加藤先生のところは東海大学の機能別分団ですが、お隣の中京大学豊田キャンパスで中京大学機能別分団として8月から入団して活動しています。

中京大学は運動部が盛んなものですから、運動部に所属する20名の団員とPR活動を目的として、よさこいサークルの晴地舞^{はちまね}というサークルがあるんですけど、その団員が約20名ほど、計40名ほどで活動をしています。これまでに規律訓練や基本訓練で消火器の使い方だとか、竹の棒2本と毛布1枚で担架がつけれるということで担架を作ったの搬送訓練、救命講習でAED・胸骨圧迫などの講習を受けたり、避難所運営ゲーム・HUGというゲームで研修を行ったり、あと学内の防災訓練に参加するなどをしてきました。

また、1月には出初式、3月には観閲式への参加が予定されています。東海学園大学さんのように、中京大学の機能別分団としてはまだ活動がしっかりとできている部分がないので、もっとその基盤を作って、ぜひ加藤先生にもあとでお話を聞いてどういうふうに行っているのかというのを、お隣の大学なものですから、一緒に活動をするのができたり、例えば何年も前からやっていたらしゃるので、（活動の）こういうところを厚くしたほうがいいよという話を個人的に伺いたいなと思っています。

やっぱり大学内に消防団があるというのを知らない人もまだ多いので、そこをもっと僕も広く知ってもらうために、まず広く浅くでいいので、中京大学には消防団があるんだということを大学の学生全員が知っているような基盤をまず作っていきなというふうに行っているんで、校内にポスターを貼りつけるだとか、年1回の防災訓練をもっと、年1回だけじゃなくて例えばシェイクアウト訓練であったりとか、そういうふうに数を増やしていくだとか、学生の分団だけでなく例えばサークルを作って防災サークル、先ほど防犯パトロールを東海学園大学さんの機能別分団はやっているということだったんですけど、

どうしても部活をやっている生徒が多いので、そこまで活動時間が持てないということで、サークルで活動してみることもいいのかなというふうに先ほどお話を聞いて思いました。

【知事】 大学の機能別分団ですけど、(大学の) 地元には、地域にもありますよね、消防団。そこはやっぱり常に連携しているという感じですか。

【後藤】 8月に正式に運用開始になって、まだまだ手薄い部分がたくさんあるので、今のところ豊田市の消防本部の消防団の担当の方が大学に来てということですね。

【知事】 なるほどね、これからさらに。8月にできたということですね。

【後藤】 いろいろもっと探って、何が一番いいのかなということを東海学園大学さんにもお話を聞いて活動していきたいなと思っています。

【知事】 ありがとうございます。またよろしく願いいたします。

それでは、森さん、どうぞ。

【森】 やはり企業というのは訓練にしろ、備蓄にしろ、建物の補強にしろ、非常にコストとして捉えなければいけないということで、やはり経営トップがどれだけ前向きに取り組むかというのが非常に大事だと思います。そういう点で、私どもは春日井市でございますが、このBCPへの取組についても商工会議所がそういった講習会を設けてその場で勉強させていただきましたし、建物の耐震診断についても春日井市のほうは助成がございます。そういった意味で我々の取組についてバックアップをいただいたという点では非常にありがたかったと思いますし、それがきっかけだったということが事実ですね。

だから、やはり全てがコストですので、どうしても経営トップとしては抑えたい、あるいは削減をしたいというのを考えがちになるんですが、(災害は)いつ来るかわからないということで、やはり人材が第一でございますので、それにかかる(コスト)ということで前向きに取り組むことが大事じゃないかなというふうに考えております。

【知事】 会社は春日井駅のすぐ東側というか、南側というか、すごく交通の便のいいところですよ。

【森】 そうですね。駅から2分です。

【知事】 駅を降りてすぐでしょう。春日井駅で最近駅舎が新しくなりましたよね。それでますます便利がよくなったわけですね。やっぱり遠方から通っている方も多いんですか。

【森】 そうですね。東濃のほうからと愛知県のほうからと大体二分ぐらいされますけれども。

【知事】 そういう意味では、いざというときはやはりすぐ帰れない方が多い。

【森】 と思いますね。

【知事】 そうなるとやっぱり会社にいてということになるんでしょうかね。

【森】 やっぱり調査してみますと7割は帰れないということで、じゃ、3日分は（備蓄しよう）ということでの先ほどの話なんですけれども。

【知事】 先ほど拝見して大変きめ細かな計画ですばらしいなと思って。

【森】 前社長がとにかく震災があったときに、実際に取り組んでみたらどうだということを取組を始めたということなんですけどね。

【知事】 ありがとうございます。

続きまして、尾関さん、また御発言があればよろしくお願いします。

【尾関】 平成14年から18年まで5年間、地域の防災リーダーとして活躍する人の養成講座、防災カレッジを行政が開催して1,260名受講者がいたわけなんです。その後いろいろ、私ども（あいち防災リーダー会）主催の養成塾とか、今、名古屋大学を会場にやっている防災・減災カレッジの卒業生を入れて、（会員が）650人いるわけなんですけど、10年以上設立から経って、かなり高齢化してきているということで、新しい人材がなかなか入ってこないという問題を実は抱えていまして、今後今の若い人がリーダー会に加盟して家具固定の推進員とか、あるいは学校防災とか、地域防災の活性化に貢献してくれるような人がなかなか集まってこないということで、人を集める方法を何か考えなければならないなというのが1つあります。

我々はボランティアで、何せ費用がないものですから、家具固定推進員の講習で使うものとか、大半は自分たちで考案して作ってやっているというのが実情です。先ほど東嶋さんが紹介されたベストも、多分自腹で作ってやってみえると思うんですけど、我々はどうしても行政さんをお願いして、行政さんが発行しておるチラシとかパンフレットなんかもお借りしてやっておるんですけど、最近ではホームページでダウンロードしてくださいとか、費用的な問題も非常にあるかと思うんですけど。

特に一般向けのチラシというのは県の防災危機管理課のほうも作っておるんですけど、小学生とか中学生用の防災啓発チラシというのは、なかなか少ない。教育委員会さんのほうで少し作っているみたいなんですけど、なかなか我々のほうへは回ってこないということで、ぜひできればホームページじゃなくてチラシ、あるいはパンフレットを印刷してもらって、我々のほうへも少し援助していただければ非常に助かるかなというふうに思っ

います。ぜひその辺はお願いします。

【知事】 ありがとうございます。尾関さんは防災リーダー西尾張ブロック、御地元の江南、いろんなイベントとか活動とかはそちらが中心ということですか。

【尾関】 一応西尾張ブロックの代表もやっていますが、西尾張は一宮を中心に10市町村あるわけなんですけど、やはり、どうしても江南が中心になります。江南は特に防災訓練なんかは学区単位でやっているという関係で年に10カ所という形で、そこでブースを開いて啓発活動をやっているわけなんですけど、それが江南の場合は（活動の）主力になるわけなんです。

ただ、私もボランティアで出かけているということで、土日が一宮中心になるので、年間の9割以上の土日が防災のイベントの関係で費やしているというのが実情です。

【知事】 それは皆さんそうですね。多分。ありがとうございます。

それでは、続きまして長谷川さん、よろしくお願いいたします。

【長谷川】 女性消防団の現在の主な活動をちょっと補足させていただきます。2017年（平成29年）9月30日に第23回全国女性消防操法大会に愛知県の代表として出場させていただきます。9月中旬から、毎週土曜日の夜7時から9時まで消防職員の方々に御指導いただきながら練習を頑張っております。現在は実災害での出動は女性消防団はありませんけれども、今後はもし機会があればこのような訓練で得た技術を生かして、江南市の災害にも協力できていければいいなというふうに思っております。

【知事】 ありがとうございます。この全国女性消防操法大会って、普通の操法、男性がやる操法と同じですか。

【長谷川】 操法のよりも小さい、軽可搬ポンプを使っています。

【知事】 普通の小型ポンプじゃなくてもっと小さいやつですか。

【長谷川】 小さいです。持ちやすいので、くるっと回して。消防車ではないです。

【知事】 これはどちらで今練習をやっておられるんですか。

【長谷川】 今は江南消防本部の車庫で。

【知事】 そうですか。じゃ、江南のチームが出られるということですか。

【長谷川】 そうです。私は出ませんが、若手に任せて頑張っております。

【知事】 4人でしたっけ。

【長谷川】 選手は全部で6名です。

【知事】 出るのは指揮者がいて・・・。

【長谷川】 指揮者がいて係が5名いますね。私は宣伝マンです。

【知事】 そうですか。じゃ、やられる方も大変ですね。

【長谷川】 頑張ってます。よろしくお願いいたします。

【知事】 ありがとうございました。

それでは、加藤先生、またよろしくお願いいたします。

【加藤】 東海学園大学の場合には、(平成25年に)県の代表として全国女性消防操法大会に女子学生が参加しております。私たちは県内最初の学生機能別分団ということで、一応進化系ということで消防団というものにこだわらないといいますが、消防だけではなく、地域の住民が安心・安全であれば、とにかく要請があれば全てトライしていこうということで、先ほど言いましたとおり観光イベント的なのといいますが、フェスタ的なものも参加しておりますけど、今、みよし市と話し合っているのは小学校への出前防災教室、これを主催していこうという話が出ております。

うちの学生の場合には単位認定とか金銭援助は一切ありません。その中でなぜ50人近いメンバーが継続して活動しているかということ、そのモチベーションになっているのは一言で言わず「見える化」ということで、住民の方に見える活動をし、その結果、住民の方から『ありがとう』の言葉をもらう。この言葉が最大のエネルギー源になっているというのが実態でございます。

ということでどんどん新しいことをやって、先ほど中京大学の学生さんも言いましたけど、ぜひ私たちがやったことをまねしてさらに発展していただいて、お互いにウイン・ウイン関係でやっていきたいなど。

私が最近学生に言っている言葉なんですけど、駄じゃれになるんですけど、「アイ・ラブ・愛知」と。愛知県を大事にしようよ、ということで、「アイ」も「ラブ」も「愛知」も「愛」ということで、「愛」が3つということで、愛さんさんということで明るい愛知県をつくらうというのを1つの標語にして活動しています。

災害時に、30名の学生に何ができるんだという話も実はあるわけです。私が学生に常に言っているのは、(東海学園大学の)三好キャンパスに2,000名学生がいますが、普段はおそらく1,000名いるだろうと。その1,000名を避難者とするのか、救助隊にするのかということところが我々機能別分団のまさに力ということで、私が分団員に言っていることは、(分団員1名がその他の学生)33名を引き連れて地域の救助、救護に行けということで、むろん消防団員として連れていった学生の生命、身体、財産を守る、安心・安全に帰させるとと

もに、住民の期待に応えられるようにやるべきだということで、東海学園大学は地域に開かれたシェルターの機能を果たさなければということを常に言っています。

【知事】 ありがとうございます。

いろいろとお話をいただきありがとうございます。

いただきました御意見等々を踏まえて、また何か御発言があればよろしくお願いたします。いかがでございましょうか。じゃ、早川さん、どうぞ。

【早川】 私ども星崎学区では、地域防災協力事業所として18事業所と（覚書を）締結しておりまして、いざ災害が起きたとき、例えば、バール貸しますよ、ダンプカー貸しますよ、消火器貸しますよという、こういうような協定を結んでいるんですが、これはハードが多いんですね。内容を見てみると。ここに人的リソースが入っていないので、今後の課題として、私ども星崎には大学はないんですが、工業高校が1校ありまして、この高校生さんと協定を結んで、いざというときは星崎学区、あるいは笠寺学区も隣接学区ですので、そういったところのハンディキャップを持った方たちのところに一刻も早く駆けつけてまず安否確認をしていただくこうというような構想があります。

その後はどうするかということはまだ決めていませんけれども、もう少しマンパワーを増やそうという構想が今ありまして、このことについて、例えば避難所でもそうですけど、私どもの地区は2か所の避難所がありますが、6,000人を超える人口の中でわずか200人程のキャパしかない避難所でどうするんだという課題がものすごく今上がってきています。

こここのところで今ちょっと歩幅が小さくなってきている。こういう課題がありますので、地区防災計画も何とか3月までにまとめなきゃいかんというところでどうしたらいいか。

このときに、その災害で死なないためにどうしたらいいか。最終的には自助ということになりまして、いわゆる耐震補強、ここからやっぱりスタートするべきではないか。その災害で下敷きにならないようにする。下敷きにならないければ、自分が生きていれば隣の人、またその向こうの人を助けに行けますので、ということでまず耐震補強を進めよう。それから、家具転倒防止もあいち防災リーダー会さんとか、いろんなNPOさんにお力添えをいただいて、各家庭に家具転倒防止等の啓蒙啓発活動を進めていこうという、こういう形で今進んでおりますので、やっぱり自助かなというところを強調しておきたいと思いません。

【知事】 今は建物の耐震化からという。学区はやはり木造家屋が多いですか。

【早川】 多いです。恥ずかしい話ですが。

【知事】 ですよ、どちらかというと、古いまちですもんね。

【早川】 そうなんです。特に私の住んでいるところは一番古いんです。すぐ倒れてしまう。液状化現象も激しい。

【知事】 それはまずは耐震診断ですね、やっぱり。耐震診断をやってください。

【早川】 そうですね。一番怖いのはやっぱり火災ですけどね。

【知事】 また引き続きよろしくをお願いします。

いかがでございましょうか。じゃ、東嶋さん。

【東嶋】 耐震とか、そういうことには子供たちは無理かもしれないんですけど、小学校でやっているのは、実際に避難所に行った時、子どもにもできるお手伝いをしようということで、避難所で何がお手伝いできるかということ、できることはいっぱいあると思うんですね。子供にでもできること。

小学生の場合だったら、お年寄りがいたらお年寄りの方にお声をかけたりとか、小さいお子さんと一緒に遊んであげるとか、子供にできることも考えていこうということをやっています。

中学生になると私たちよりも力があるし、腰も痛くならないので、重いものを運んでもらうスタッフに入ってもらったりとか、中学校でもそういう防災講座をやったりして、一緒に動くような訓練をやりながら進めていくことで、自助プラス共助に近いものということをもみんなで考えよう。

このようなことを進めていくのに当たって、市役所の担当課がいろいろと違うところがありまして、それぞれ話をするときにどう連携するんだろうというふうに少し考えてしまうことがあります。やはり提案する私たち民間と、市町村役場の方からも手を出していただいて、手をつながないと共助ができないということがあるので、民間の人たちを入れるような方策がもう少し進んでいくといいのかなと。

それから、自主防災を考えると、学校の防災というと、ちょっと違うんじゃないかというふうにどうしても考えがちなんですが、実は小学校、中学校、高校でもそうですけど、通っているお子さんはどこかの町内に住んでいるわけですから、そういうふうな提案をしながら学校を回りますとわかっていただけるので、少しずつそういう活動を進めながら、行政サイドからも一緒にやっていくことが自助、共助であるというようなことがもう少し進んでいくといいのかなということを感じています。

【知事】 私も11月の頭ですね。弥富で地震と津波の防災訓練をさせていただきました

けど、皆さん大変熱心にやっていただいてありがたいなと思いました。確かにヘリコプターでぱっと上から、なめるようにずっと何か所か回りましたけど、河川というか、水路が何か網の目のように走っていて、あとこっちの南のほうは全部農地、干拓地で、そういう意味では皆さんの防災意識も高いのかなというのは思いましたけど。また引き続きよろしくお願いいたします。

ほかにいかがでしょうか。じゃ、加藤先生。

【加藤】 学生機能別分団をやっていますとちょっと普通の消防団と違うということにして、何が言いたいかという、私は大学の教員で学生を教育的には指導できるんですけど、消防団の中での私の立ち位置はただの連絡係。ですから、消防団長からの直接命令もないし、私自身と学生との関係は教員と生徒ですけど、(私は) 地元の消防団とは関係がなく、市役所を経由しなければ(話が)進まないことが地域連携で非常に困ったもので、東海学園大学の私の立ち位置をどうするかが決まらない限りは学生消防団と教員の関係が全部決まらなくて。ですから、私は何で命令しているんですかと言われちゃうと教員ということになるしかないんですけど。

大学の本音というのは防災は賛成なんですけど、有事の際には学生は学内にとどまれということで、そちらのけがのほうを恐れるんですけど、消防団こそはまさに学外に出なければいけないわけで、そうするとそれを指揮する教員に何の権限もないということについて、これは県内全体としてひとつお考えいただけるといいのかなということで。消防団法上では位置づけがないんですね。

それから、もう一点、先ほどお話の中で新人が入ってこないのが困っているよという話があるんですけど、現実には50名の人間が入って、出ていく形になりますけど、今現在30名が正規団員になっているわけで、OB・OGがいますけど、彼らに聞いてみると卒業した後にはおそらく地元(の消防団)の基本団員にはならないという意識があるんですね。

それはなぜかという、学生だからやっているということで終わっている部分があるんですけど、実はみよし市の人に聞きましたら二重加入ができると。規定上。つまり、みよし市の東海学園大学機能別分団とともに、ある学生がどこか居住地の基本団員になることも可能なんだと。ただ、その市町村がオーケーならばということでして、みよし市は考えると言ってくれたんですけど、学生のほとんどは他の市町村なので、だから、県内全体として、学生機能別分団と基本団員は兼務できる(ようにしてはどうか)。年金とか金銭上の

問題があるんですけど、学生分団の学生は年数の関係で年金がもらえないので、重複することはないので。

ですから、僕は二重加入というのを1つアピールすることで、少なくとも今の私たちの分団員が各市町村の基本団員とコラボができることになって、仕組み全体がわかっていないと言っちゃ失礼なんですけど、あまり消防団の方も基本団員、基本団員で頭が固まっちゃっていて学生は関係ないということでやるよりかは、学生はそれぞれ定住地がありますので、そこら辺が1つ突破口かなという考えを持っています。

【知事】 ありがとうございます。今言われた機能別分団の位置づけとか、そういったもの、確かにそれは全体的な課題だと思いますので、また一度我々も研究、検討したいというふうに思っております。

また、消防団員の確保というのは県内というか、全国的な全てのところの課題でありまして、やはり昔は地元の農家の方とか自営業の方が多かったんですけど、今はもうほとんどサラリーマンの方なので、そういったときにどうやって確保していくかというのは本当に大きな課題で、私どもは1月20日を「あいち消防団の日」としてPR活動に努めておりまして、これは実際（消防団を）編成しているのは市町村の皆さんなので、ほんとうに深刻な課題だと皆さんは受けとめておられるので、一緒になってしっかり考えてアピールしてやっていければというふうに思っております。

さて、大分時間も過ぎましたが、大体ひととおり、皆様に御意見を伺ったような気がしますが、さらにいかがでございましょうか。よろしいですか。じゃ、後藤さん。

【後藤】 今、加藤先生がおっしゃられたようなことはまさにそのとおりだなと思って、学校側は生徒にけがをさせちゃいけない、でも、災害時にはやっぱり僕らが消防団である以上、地域を助けたいし、大学を守っていきたいという部分はあるので、その辺はもうちょっと全体的に市だけの話ではなく県内全域、もしくは全国で協定をしっかりと定めていただければ僕らも納得がいきますし、その活動も全国一緒だったら動けるのかなというふうに思います。

やっぱりけがをしないのは一番なんですけど、助けたいという気持ちも僕らはあるし、僕らの大学の中には消防士になりたくて機能別分団に入っているよという人もいると思うので、それもいい経験になると思うし。災害を経験で済ませるのはどうかとは思いますが、そういうふうな意味でも加藤先生が言っているように僕らの大学もしっかりと市だけの話ではなく県の話、もしくは全国の話で定まっていれば活動しやすいのかなというふ

うに、話を聞いていてまさにそうだなと思いました。

【知事】 ありがとうございます。大体皆さんに御意見をお伺いしたかと思えます。

長時間にわたりまして御意見をいただき、また、活発な意見交換をいただきましてありがとうございます。

それでは、私から最後に感想を申し上げさせていただきたいと思えます。

今日は皆様方の貴重な御意見、さまざまな御意見を大変興味深く聞かせていただくことができました。今後県の取組を進めていく上でぜひ参考にさせていただければと思えます。

「備えあれば憂いなし」と申します。災害への備えを着実に進め、安心・安全なあいちの実現に向けまして取り組んでいきたいと考えております。

また、私自身国会議員の折から知事の任期も通じて、ずっと地域のいろんな防災とか、そういったことに取り組ませていただいておりますが、やはりこの地域は、今から十数年前に、もう15年近くになるんですかね。東海地震の震源域がもともと静岡だけだったのが見直しになって、こちら側の西のほうに来て、ほとんど愛知県内も東海地震が起きると震度7の地震の対象になるような、こういう想定の見直しがあったこともあり、相当地域の防災訓練とか自主防災とかさまざまなこと、学校も含めた施設の耐震化も全国に比べれば相当進んでいる、意識も高いという思いがしております。それでもって地域の自主的な防災訓練等々も非常に活発にやっただいていてというふうに思えます。

それは風水害、つまり伊勢湾台風という大変な大災害に見舞われたという経験がまだ生々しく残っているということも1つあるかと思えますし、私の地元、僕は三河のほうでございますが、やっぱり昭和20年の三河大地震でたくさんの方が亡くなっていると。実は私の身内も亡くなっておりまして、そういうことも語り継がれているということもあります。そういう意味では非常に防災の意識が高いと思えますが、それでもやはり「備えあれば憂いなし」ということで、そういったことを常に念頭に置きながら自助、公助、共助で、みんなで安心・安全なあいちを作っていければというふうに思っております。

今日御参加いただきました皆様方には今後ますます御活躍をいただきまして、地域防災力の向上に向けて御支援、御協力をいただきますようお願いを申し上げます。

本日は貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。大変有意義な機会となりましたことを心から御礼申し上げまして、私からの感想と申しますか、総括とさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —